

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 31回 「GNN」と「ABC」

イラン復興支援のための海外派兵が、陸、海、空それぞれの自衛隊で実施された。有史以来初めての経験を実施したわが国にとって、正に、賛否両論。国論を二分するかの論議が巻き起こっている。が、すでに派遣は実施された。

陸上自衛隊イラク派遣部隊の指揮官・番匠幸一郎氏 一佐 が、サマワに到着した翌2月28日、仮宿営地での初朝礼で述べた挨拶は、今、マスコミでも話題になっている。「我々は、戦争にきたのではない。これは万国共通の概念だ...」としながら隊員一人ひとりに「義理（G）、人情（N）、浪花節（N）」を心構えとして求めることを強調した。

番匠一佐は、派遣部隊のトップとして「武士道の国の代表として」というフレーズを繰り返してきた。サモア到着の際には、日本のことを「ライジング・サン、日出ずる国」とも言った。言葉だけのニュアンスは、何かいかにも、右翼的で、軍国的で、もうそれだけで嫌悪感を感じる人もいるだろう。進歩的文化人と自負する人種は、^{しかめっつら} 顰め面をしつつ顔を^{そむ} 背けてしまう光景が目につく。

しかし彼の言いたかったことは、そんな、表面的陳腐なイデオロギーの問題ではない。全世界から注目され、「日の丸」を胸に、危険極まりない歴史的任務を無事に果たすべき、想像もできないくらい大きな責任感と、緊張感の表れだったに違いない。それを素直に、彼自身の言葉で述べたものなのだろう。

さらに彼の訓示は続く。「当たり前 A のことを、ポーズ B としないで、ちゃんと C やる」ことの大切さを力説する。こんな簡単なことをもし^{おこた} 怠ったら、我々今の環境では、「ごめん」ですむことも、サマワでは「死」に^{つな} 繋がる。彼にとっては至極当然で、最重要、生死に関わることである。

「平和ボケ」が蔓延する日本のマスコミは、番匠一佐の挨拶を面白がり、茶化したり、まともに批判したりしているが、何をかいわんや、自衛隊は真剣である。復興支援といえども、何時、殺されるか分からない...そんな環境の中で、若い隊員は、幼い我が子と最愛の家族を残し、過酷な任務を果たそうと「命」をかけている。

好戦的軍国主義の復活だとか、大儀のない派兵だとか、訳が分からん屁理屈をいつまでも言っていないで、^{おもむ} 純粹に人間として、日本の国民として、現地に赴いた自衛隊の諸君を^{きづか} 気遣い、応援してあげたい。そんな声を堂々と大声で主張することが、今、とても必要な時ではないだろうか？

「GNN」と「ABC」、皆さんはどう、思いますか？